



表紙の人・文

大畑 楽歩 (おおはたらぶ) さん

1978年生まれ。主婦業の傍ら、脳性まひ者を生かした講演や執筆、整理収納アドバイザーを通じてノーマライゼーション社会を提唱。著書に『三重苦楽』がある。

<http://www.ohotarabu.com>

歩くこともおぼつかないアドバイザーに片づけの依頼なんてきません。気心の知れた近所さんから「ちよっと来て」とお声がかかれば、諸手を上げ電動車椅子でお伺いしています。できないことは助けてもらいながら、私は嬉々として片づけます。さらに喜んでもらえて最高の瞬間。受け入れて下さる依頼主さんさえいらっしやれば：それだけが身障者アドバイザーの難関だと思っていた私でしたが、そうではなくて世間の目が最も問題だったのです！「身障者に過酷なことをさせて、なにあの人：」という眼差しが依頼主に向けられてしまいうすべてはココにあったのです。いくら楽しそうに片づけていることがわかって、やっぱりそこには古くから社会全体にはびこった障害者像が大きく横たわり、ノーマライゼーション社会へ行き着くための、目には見えない大きなバリアが存在したのです。これはもはや理屈ではなく、時間のかかることだと思えます。身勝手なかもしれないませんが、依頼して下さる方がいらっしやる限り、私は身障者のアドバイザーとしての活動を通じて、この崩壊作業も担っていきたくらいなあと、思っています。

日夜アドバイザーの腕を磨くべく、お家を実験ハウスにしてお片付けを楽しむ妻を持ってしまった夫は、夜ごと日ごとに目まぐるしく配置が変るなか「どこに何があるか全然わからへん」という雄叫びを上げる度、私の研究意欲はさらにそそられるのでした。



No. 237 2014.6.1

(撮影 田中はるお)

(医) 永原診療会
京都市上京区千本五辻上る
☎461-0636

制作 びーぶる編集部
vivreeoffice@gmail.com

いつも人に何かしら手伝ってもらわなければならぬので、物の置き方を明確にして、人に頼みやすい整理を心がけているという大畑さん。



私の母は整理が苦手なタイプ。考えるより先に行動したい人で、どんな環境でもササッとこなす母をお手本にしていたのでは、身障者の私が、どんなに頑張ったって足元にも及ばないことに気がついた私は青ざめ、どうすれば障害があっても、みんなと同じように楽しむことができるのだろうか。それが私をあくなき「整理収納への道」に向わせたきっかけでした。

環境を整えば動きやすいだけでなく、障害のためにどうしても時間がかってしまう欠点も、整理収納がカバー。行動が遅くとも、ムダな動きをなくすることで、少ない体力でも余裕を



無駄なく整理されたクローゼットにポンと置かれた赤い上着。「ほらね、こんなにするのは夫です」と、すかさず横から「これは僕が使いやすいように置いといたんだ」

きちんとしすぎない大らかさが人に安心感を与えるコツかもしれません。

持って一日を終えることができ、また頭の中の整理をつけておくことで、イライラせずに自分のプロークンなカラダとも上手に付き合えるようになったのです。

なにかものを頼む際につきまとう精神的負担も、整理された環境においては、驚くほど軽減させるから、私にとっては麻薬のような存在なのかもしれません！

インテリアだけでは無い整理収納力が秘めたパワーを実感すればするほど、みんなにも実感してもらいたいって思っちゃうんですね。でも